

白選五十一首



松平盟子

まつだいら・めいこ 1954年、愛知県岡崎市生まれ。南山大学在学中の76年、「コスモス」入会。77年大学卒業。同年「帆を張る父のやうに」で角川短歌賞受賞。91年「プラチナ・ブルース」で河野愛子賞。同年「コスモス」を退会。93年季刊「プチ★モンド」刊行。歌集はほかに、「青夜」「シュガー」などがある。

父と娘と待ち合はせゆふべ帰るさまウインドの続くかぎり映れる

泳ぎ来てプールサイドをつかまへたる輝く胸に思想などいらぬ

宙へ地へ還るブランコこのゆふべ街は衛星のごとく寂しき

君の髪に十指差しこみ引きよせる時雨の音の束の如きを

口うつされしぬるきワインがひたひたとわれを隈なく発光させる

父性とはたとへば霏々と山に降る雪のあはひに立つ檜の一樹

立ちあがる波の奥暗しみづからをもてあますもの抱えこみ立ち

凍てつきし天に荒星なだれるてぎんぎんと夜の軋む音する

降るさくら地を鎮めゆく爪色のさくらの上を死者かよふため

未来とはまづ明日のこと珈琲を冥府のごとき胃に墮しつつ

朝ごとに男放ちやり夜な夜なを戻り来かはゆし男とふもの

「帆を張る父のやうに」

「青夜」

反省癖がある。どうしてあんなことをしたのだろう、言ったのだろうと、くよくよ悔やんだり、情けなくて仕方なくなる。けれども一方で、健忘症的蒙昧さと楽観的暗愚さが私を別な気分誘い込み、反省はいつの間にかどこかへ消えてしまう。そして失敗を繰り返して、反省を重ねる。

こんなふうにして中年も中盤となってしまう。四半世紀を短歌とともにあって、私は何を得たのだろう。または何を失ったのだろう。よくわからないけれど、八冊の歌集が手元に堆積しているところを見ると、これは得たものに入るのだろうか。

歌集をあちこち拾い読みする。あの頃には確かにあった若さとか、贅肉のない身体とか、

梨をむくペティ・ナイフしろし沈黙のちがひたのしく夫とわれとある

「シユガー」

氷雨ふる未明呼びいだす熟睡の夫よりまぢかにドリアン・グレイ

三十代日々熟れてあれこの夜のロゼワインわれを小花詰めになす

萩ほるほる薄紅うすくれなほのちりわかれ恋は畢竟ひつじやうはがれゆく箔

母と妻その着ぶくれのごとき身をとりあへず据ゑボルシチ啜る

やうやくに飼ひならしたる「悲と哀」が「火と愛」に音おんかよふことあはれ

切るナイフえぐるスプーン刺すフオークきらきらしくて惨たり食は

「フラチナ・ブルース」

女の舟めおと男の舟の綱ほどけゆくのでなくわれが断ちきりてやる

あつさりとカシミアセーター着くずして自転車に乗るように生きたし

押しひらくちから蓄に秘められて万の桜はふるえつつ咲く

今日にして白金はっきんのいのちすててゆくさくらさくらの夕べの深さ

独り寝の夜ごとをきては螢ほたる子を奪われし母の額てらす

ずぶずぶの泥水の靴履きて行く夢にふたり子置き忘れたり

「たまゆら草紙」

クレヨンに「肌色」という不可思議の色あり誰の肌とも違う

くちびるは柔らかきゆえ罪深し針魚さよりの銀の細身を好む

人に言うべきことならねども床下に大櫳おおきまがが口を開けおり

三十代見納めるときわが視野に紫におう東京がある

ファスナーは銀の直線、みずからを断つ涼しさに引き下げており

「うきはらし」

シャンパンは唇くちづけに似て唇づけは夜ニエのひびきの名残にも似て

足長のものならグラスも馬も好き階段のぼる恋人はなお

庭の桜の木とか、黒いダイヤル電話とか、幼いものいる日々とか、旧式のワープロとか、そんなものが脈絡なく彷彿とする。それらを記憶に留めるために短歌を作ったわけではないけれど、言葉と言葉が編み上げる空間のうちへ、当時私が目にしたはずの映像や味わった心情が勝手に紛れ込み、動き始める。

そしてまた思う。残された歌集は私自身の何を物語っているのだろう。読者がどう判断するか知らないが、詠まれている内容の半分以上は事実ではなく、大道具、小道具が配置された舞台と、舞台裏手の細い通路と、楽屋の外の原っぱとを行ったり来たりする過程で短歌ができ、歌集がまとまってしまった、という気もする。これは、だから結局何なのだろう。

「短歌を愛していたか？」と問われれば、そうとも言えるし、「短歌に絶望はしなかったか？」と聞かれれば、全くしなかったとも断言できない。相性の悪くはない相手と長年いっしょに生活してきた果てに、ときどきの浮気を表沙汰さたにしなかつた欺瞞ぎまんさえ許し合い、そんな諦めあきらめとそれなりの情を噛みしめている仲らい、といったあたりかもしれない。

それにしても、こんなことを書く年代になつた私なのである、嗚呼。

で、短歌は続けるか、つて？ たぶんね。

デイスプレイの中には桜ふりつづき徒にながめせしまの四十歳
遠くから飛び来て遠く去るもの一つか恋も首細き鶴も

浮遊する閑雅空間ホテルより眺める今の儂はかなはかな

くちづけす イタリアの陽は烈しくて目を閉じおれば恋人の唇
そのむかし五位鷺のわれは見下ろせり多に眩しき武蔵野の沢を
逃げ水が逃げなくなつてゆわゆわと近づくとしたたとえば老いは
晩秋の光の中に透明の馬あらわれて時計を吐けり

熟すまま来世紀まで寝かしおく葡萄酒千本そして恋人

男傘ばさりと開き全身を黒蜜のつやに塗り込めており

つきつめていえば日本はマージナルな一等国にてそのほか知られず
晩餐へ繰り出すまえの儀式なりシャンパンとBaiserベゼ軽くはじける

「カフェの木椅子が軋むまま」

まだ知らぬフランス語の〈言葉〉繁茂してブローニーの森、ヴァンセンヌの森

パッシー駅そのむこうには川が見え藍のセーヌの背中うつくし

太ももが左右がつしと前に出てパリの舗道をどこまでも踏みし

垂れこむる冬雲のその乳房を神が両手でまさぐれば雪

「カフェの木椅子が軋むまま」以後

四十代半ばは獣道に似る 夜歩くべし手斧をもちて

馬の肌ゆびさきに辿るしずけさに秋は終わりぬ尾花ゆれおり

厳寒の最終列車に乗ることく過ぎし父おおと叫ぶ口して

風凍る深夜一月いっぽんの白糸に引かれ父は息絶えし

「オビウム」